

Title	大阪大学文学部国文学研究室蔵 後鳥羽院御集（翻刻）二
Author(s)	山本，一；佐藤，明浩
Citation	語文. 1985, 46, p. 50-63
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68739
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

大阪大学文学部国文学研究室蔵

後鳥羽院御集 (翻刻) 一一

山本 一・佐藤 明浩

詠百首和歌

春百首

- 六〇一 うちなひき春はきに^{けり}。朝またき昨日にかはる嶺の白雲
- 六〇二 まかねふくきひの山かせ打とけて細谷川も岩そよくなり
- 六〇三 みよしのゝ瀧のいともてとちこめし川との氷けふやとくらん
- 六〇四 天にますとよをか姫のゆふかつらかけてかすめるあまのかく山[」] 35^ッ
- 六〇五 天の戸は所もわかすかすみつゝ宮もわらやも春は来にけり
- 六〇六 消やらぬ雪まにねさすかた岡の草のはつかに春めきにけり
- 六〇七 よしの山今朝はみゆきも消はてゝ霞にたゆる岩のかけみち
- 六〇八 みよし野の松の葉しろき山のはにかゝりもやらぬうす霞哉
- 六〇九 しからきの外山の空はかすめとも峯の雪けは猶分ゆらん^本
- 六一〇 今朝こゆる春の行手にかすみけり音はの山の鶯のこゑ
- 六一一 春の日になをさえ残る沼水や袖のこほりのためし成らん
- 六一二 いせ鳥やいちしのうらの蟹乙女春をむかへて袖やはすらん
- 六一三 春はまたあさゝは水の袖ぬらし摘やね芹の猶こほりつゝ
- 六一四 朝またきたかためとしも若菜摘野沢の草はむすほれつゝ[」] 36^オ

- 六一五 君かためをのゝあれたをふみ分てえくつむ袖やかつこほりけ^ん
- 六一六 梅か枝をおれはこほるゝあは雪はをのれも匂ふ心地こそすれ
- 六一七 あらち山やたのゝ野辺も春めきぬ峯の淡雪ぎえやしぬらん
- 六一八 山ふかみとはれんとはた思はねとかきほの梅のしるへかほ也
- 六一九 生駒山いとひし雲はなけれども霞をかくる春の明ほの
- 六二〇 みわたせはなたのしほやの夕くれにかすみにかゝる奥津白波
- 六二一 うちなひき春のくるてふ色なれや霞にめくむ青柳の糸
- 六二二 ^{新後發}から衣竜田川原の川風に浪もてむすふ青柳のいと
- 六二三 そてたれてたかかたみとはわかすともけふやつまゝしみねの^草 早蕨
- 六二四 としへたる浜まつかえの手向。はらはぬ色も春はみえけ^り 36^ッ
- 六二五 百千鳥さえつる春はあさみとり野への霞に匂ふむめか枝
- 六二六 梅かゝのそれかと匂ふ夕へかなたか袖ふれし名残成らん
- 六二七 猶さゆる雪につゝめる声ながら梅かえわきて鶯をなく
- 六二八 ものことにあらたまりゆく春雨にいとゝふりゆく我そ物うき

六二九 まつらかたもろこしかけてみわたせはさかひは八重の朝かすみかす
みかも

六三〇 すみ染の袖に匂ひは移る共おらてはすきしのへの梅か香

六三一 にはすは誰かはゆきてたおらまし霞も八重の野への梅かゝ

六三二 なかむれは霞も浪もはてそなきすまのせきやの明ほのゝ空

六三三 うちわたす遠万人の袖ながら霞にこもるよとのつき橋

六三四 梓弓をして春雨いるかたもさたかにみえぬ春の夜の月」37オ

六三五 うくひすをさそふしるへの春かせも花のあたりは猶もよかな

六三六 鶯のこそこのやとりの梅かえにかはらぬねこそ袖はぬれけれ

六三七 袖ふれてたかためとしはわかすともけふやつまゝし峯の早蕨

六三八 竜田山花にあらずとも誰かみむ桜かえたにかゝるしら雲

六三九 なかめてはいかにかもせんわきも子か袖ふる山の春の明ほの

六四〇 みよしのゝ月にあまきる花の色に空さへ匂ふ春の明ほの

六四一 いとふへき方こそなけれ久かたの月をへたてぬ花の白雲

六四二 をはつせや霞にまかふ花の色をふしみのくれにたかなかむら

六四三 猶なをきかはまれなる人もとひこかし山桜とのはるのゆふくれ

六四四 ときは木のたえまに匂ふ山桜まれなる色にめかれやはする」

六四五 春ことよし野のたけにかゝる雲のこゝろ空なる山桜哉

六四六 難波かたかすまぬ波の明ほのにをのれはるなるあまの釣舟

六四七 みよしのゝとやまにはなのさきぬれは春を絶せぬ滝の白糸

六四八 する人も花より外はあらし吹身は山なからいくよ経ぬらん

六四九 明やらぬ月のかげさへ匂ふかなはなのあたりの春の曙

六五〇 山路わきて手折桜の夕露にぬれてそかへる花のかたみに

六五一 面かけに夕ある雲しまかひけんたくひをよはぬ山さくら哉

六五二 みし人の心うつるふはなの色にたかかことよりあらしたつら

六五三 咲あまる花のかけもるみよしのゝ臘月夜に匂ふ山かせ

六五四 昔たれあれなん後のかたみとて志賀の都にはなをうへけん」

六五五 箸たかをすゑのゝはらの桜かりしらふにはなの色をまかへて

六五六 あた夜の名残を花に契をきて桜わけいるあり明の月

六五七 朝またき霞もやへの塩かせにゆらの戸わたる春の舟人

六五八 たつねこしまきの遠山の朝ほらけ家路もみえぬ春霞哉

六五九 あかしかた春こくふねの鳥かくれ霞に消るあとのしら浪

六六〇 たにふかみかすみにとつるまきの戸を春のたよりにたゝく山

六六一 煙たつ室の八島はしらねとも霞そふかきをのゝ山さと

六六二 帰雁かすはたゝすやなりにけん山とひこゆるかすそすくなき

六六三 今はとてはやくもかくれ行かりは秋こしつらやかはらさるら

六六四 今はとてたかあかつきをうきものと晨明の月にかへるかりか

六六五 春といへはかくてもたゆき玉つさの契むすはて帰かりかね

六六六 うら人も難波の春の朝なきにかすみをむすふあみのうけ縄

六六七 伊せ鳥やしほひのかたの朝なきに霞にまかふ和かの松はら

六六八 心あらん人の為とやかすむらんにはのみつの春の明ほの

六六九 さゝ竹の大宮人の恋しきにかさすさくらをかたみにやみん

六七〇 花にあかぬなけきはかりに年を経し昔も猶や袖はぬれけん
六七一 芳野山くもらぬ雪とみるまてに有明の空にはなそちりける

六七二 久方の天ぎる雪のこゝちして霞よりふる山さくら哉

六七三 山姫のかすみの袖やしほるらん花こきたれて春雨そふる

六七四 馴ゆくはうき世なればや御芳野の山の桜もあかて散らん^{39オ}

六七五 三室山神のしらゆふはるかけておしめとあたの花はたまらず

六七六 志賀の山はなのした行たひ人のすけのを笠につもる白雪

六七七 春雨のふるは涙とちる花をおしみもあへぬしかの山こえ

六七八 浪もせになかれもやらすよしの川をのかかけたる花のしから

新後拾

六七九 くもゐなる高まの桜ちりにけり天津乙女の袖匂ふまて

六八〇 吹にはふ花のつまとはしら雲のいつやまのはにかよりそめけ

ん

六八一 みよしのゝきざ山きはちる花は松につもれる雪かとそみる

六八二 すみすてし人さへつらし山かせに桜みたるゝしかの山さ^{ふるイ}

六八三 ふりにける吉野の宮の桜はなひとりちるともたれかしのはん

六八四 いとふとや人はみるらんかり衣さくらの雪に袖をはらへは^{39ウ}

六八五 よしの河岩こすたきもたえぬへし嶺のさくらに風吹比

六八六 これまてもうき世にとまる心かなあたる花のちるを詠て

六八七 つみにこんをのゝ芝生のつほすみれわかむらさきの露にぬれ

つゝ

六八八 わきも子か袖のつますりいかならん浪に色こきかきつはたか

な

六八九 玉川の岸の山吹かけみえて色なる波にかはつなくなり

六九〇 秋冬の花の露そふ玉川のなかれてはやき春の暮哉

六九一 山吹のはな色衣さらすてふかきねや井手のわたりなるらん

六九二 春雨にぬれつゝおらんかはつなくみつのを川の山吹のはな

六九三 都人今もこしまの山吹に浪おりかくる宇治の川なみ

六九四 しむておる袖さへふかく匂ふらん藤のうら葉につたふ春雨^{40オ}

六九五 山姫のはなの袂やしほるらんくれ行春のあかぬわかれに

六九六 咲のこる花のかたみをおもふにも心のつまにかゝる藤なみ

六九七 山の井のあかても春そくれにけるむすふしづくに影をとめな

ん

六九八 大方のなかめは春にかきらねとけふのこよひそ袖はぬれける

六九九 なこの海のいり日をあらふ浪の上に春の別の色をそへつゝ

(二行分空白)

夏五十首

七〇〇 夏衣けふたちぬともつけやらんかせのたよをしる人もかな

七〇一 たけしまの波のよるかともゆる迄かきねをこえてさける卯花

七〇二 布さらす八十字治川の里人のやとにまかひてさける卯の花^{40ウ}

七〇三 おもひいつるその神山のもろかつら昔をかくるつまとなりぬ

る

七〇四 くれし春たなぬの水にたねまきし苗代かきは今やさすらん

七〇五 大空のひかりになひくあふひ草いつまてかけしかさし也けん

七〇六 日かけ山さしもかけこしもろかつら落葉をたにもよそに聞哉

七〇七 神山の麓のもりの郭公なれし昔の音にや鳴らむ

続古

七〇八 神山にゆふかけてなく時鳥しぬ柴かくれしはしかたらへ

七〇九 いくしたつるいほしろ小田のうき草になくやかはつのごゑも
すみけり

七一〇 くるゝかとみれば明ぬる山のはにかたふくほとも夏の夜の月

七一一 心あれやさよふけかたのほとゝきすまつになく也玉川の里

七二二 たか香にかはな立花の匂ふらん昔の人もひとりならねは⁴¹よ

七二三 榊とる卯月の後のならのはにまはらに夜半の月ももりけり

七二四 夜もすから涙やそゝく郭公今朝は露けき軒のたち花

七二五 五月こはむろのはやわせ手たまゆらとりあへすなけ山郭公

七二六 時鳥ともに山をやいてつらん雲間の月に一こゑそなく

七二七 なつ山にたれを恋てかほとゝきす声ふりたてゝ夜はに鳴らん

七二八 みしか夜のかねてももうき晝に山時鳥一こゑそなく

七二九 郭公まつとし人やつけつらんいなはの山のみねになくなり

七三〇 時鳥そらにしほるゝ声す也鳥羽田の面の雨の夕くれ

七三一 子規かたふく月ややすらふと有明の雲にしはしかたらへ

七三二 ほとゝきす雲のいつくにやすらひてあけかたちかき月に鳴ら
ん⁴¹ウ

七三三 山田に引しめ縄のなかき日も猶くるゝまでとる早苗哉

七三四 わきも子かはすまもなしと夏引のいとひやすらん五月雨のこ
ろ

七三五 あつまやのかやか軒はもいかならん日数ふりゆく五月雨の比

七三六 おりしもあれすゝしくもる村雨の雲まにきなく山子規

七三七 をやみせぬよとのわたりの五月雨に雲路夜ふかき山郭公

七三八 袖ぬらすたなかの原のさみたれに光たなきもくちやしぬらん

七三九 五月雨のほともこそふれ御芳野のみくまかすけを今日やから
新後撰

まし

七三〇 さみたれは藻塩のけふり立まといあまのとまやそいとゝいふ
せき

せき

七三一 哀也こん世そかねてうかひ舟うきてもえ行かゝり火の影

七三二 夏かりの玉江のあしの下かくれたくやはたるのあまのもしほ
火⁴²

火⁴²

七三三 夢の世によそへつゝみる朝かほの花の露にそ袖はぬれける

七三四 ゆく螢草のたもとにつゝめとも猶かくれぬはおもひ也けり

七三五 まとのうちにわれはあつめす飛螢もゆるおもひは思しれども

七三六 夕たちの雲の名残を吹かせにあさの葉なひき露そこほるゝ

七三七 夕立のすきぬる跡の空晴て入日にみかくまつの下露

七三八 雨そゝくはすのうきはにゐる玉のたまらぬものは涙也けり

七三九 やましるのよとのまこも絶くゝにみたれてやとる夏のよの
月

月

七四〇 きふね川岩うつ波に飛はたるたかあくかるゝ玉にか有らん

七四一 夏山の峯とひこゆるかさゝきのつはさにかゝる有明の月

七四二 あかなくに雲のいつくにやとりつゝはるればあくる夏の夜の
月⁴²

月⁴²

七四三 なつの月まつよひなから明にけり岩もる水も結びあへぬに

七四四 隙もりし玉江のあしはそはたてゝすゝしとやとる夏のよの月

七四五 夏野わけ草のあをはをゆくしかのこゑはほに出ぬ夕暮の空

七四六 をきかさねこほれもやらて白露の秋かせをまつ宮城のゝ原

七四七 みそき川あらふる神やなひくとて今宵をかゝる波のしらゆふ

七四八 けふといへはさはへの神やみそきする河瀬の波に心よすらん

七四九 御祓川かたへすゝしくよる浪に手にとるあさもあき風そふく

(一行分空白)

秋百首

(実数九七首)

七五〇 昨日まで忍ぶのうらの秋のかせけふあらはれてなみもよせけり43オ

七五一 さらてたにうらみ侘ぬる夕くれの萩の上葉に秋は来にけり

七五二 いかばかり草はに露のあまるらんすかのあらのに秋たちにつり

七五三 朝またきとはふく秋の音たてゝをかへの松にかせかはる也

七五四 ほにいづるむろのをしねもからなくに山田のいほに秋かせそ

吹

七五五 すまのあまの袖にくたけて玉そちる岩うつなみに秋や立らん

七五六 夕されはいなほそよきて吹かせにあしの丸屋をとふ人もかな

七五七 萩原や秋ふくかせやすゝむらん下葉みたれてものおもへとは

七五八 里のあまのたくもの煙心せよ月のてしほの空はれぬ也

七五九 銀河あさせふむまにふけぬとや紅葉のはしをわたしそめけん

七六〇 織女のあかぬ名残の涙にや雲の衣もしほれはつらん43ウ

七六一 今日まては猶秋かせも忍ふ山した葉そくすにまかふ夕露

七六二 夕されはまのゝ秋かせ吹みたりしつ心なきはきのうは露

七六三 世のうきにおもひととりてし松のとをさすかにあきのたつねきにけり

七六四 葎わけて月もまはらに成にけりまきのふせやの秋のよなく

七六五 さしかかへるうちの川長いく秋かしつえにやとる月はみゆらん

七六六 あぎといへは野にも山にもすむ月のわか袖にしも本ノマしほらん

七六七 天の原雲吹はらふ秋かせに山のはとをくいつる月かな

七六八 かつきゆるのはらの露にすみ侘て外山にかへる晨明の月

七六九 まれにたにとはるゝ方もなきやとにたか玉章の初雁の声

七七〇 朝霧にやへ山こえてくるかりのつはさ吹ほすみねのあきかせ44オ

七七一 わくらはにいかにとゝはん人もかな晴ぬ雲の秋そ上歌こたへん

七七二 飛鳥のあすかのさとの垂君かあたりの秋やこふらん

七七三 すみそめの袖こそあらめ吹むすふ風はむかしの秋の夕暮統古

七七四 長夜もあかすそみつる久かたのあまのとわたるあり明の月

七七五 明ぬるかかせにわかるゝよこ雲のたえく残る山のはの月

七七六 廻あはん月のみやこはしらねともはかなく契る有明の月

七七七 ふかき山の露の夜すから秋かけてすみこし里は鴉なく也

七七八 秋されはゆる山田のひたすらに世をうきものと思ひわひぬる

七七九 白露の遠方人もとひこなんすそ野をかこふ萩のまかきに

七八〇 我ならてたれかおきゐてこたへましそとの萩のとはすかたりを44ウ

七八一 小萩原わけゆく鹿の跡よりや下葉の露に月もすむらん

七八二 秋といへはなへての空も色そそふ月のかつらのをのかひかりに

七八三 夜半になくかりの涙はをかねとも月にうつるふまのゝはきはら

七八四 とまをあらみかりほの庵ももる月のなれても袖にぬるゝかほなる

七八五 はまかせにおはなな露はたまらねと真野の入江に月は澄けり

七八六 昔むしろさしては秋のつまやなきもらぬいはやの初雁の声

七八七 難波かた浦こく舟の浪の上にかけすみ渡るあきのよの月

七八八 菅原やふしみの里のさゝまくら忍ひしものを秋の夕くれ
七八九 露しけむくらの宿のさひしきに昔に似たるすゝむしの声
七九〇 分てなを秋はたもとそしほれそふいつはとわかぬよはのね覚

も 45オ

七九一 長夜をひとりやなきてあかさましとふらふ虫の声なかりせば

七九二 おとろかす野原のむしそ哀なる心にわかぬあきのゆふへを

七九三 たか御祓ゆふかけ草の下露にをりはへてなくきり／＼す哉

七九四 大江山いく野の道の長夜に露をつくして宿る月哉

七九五 春あかつきかたの草のいほに人つてならぬ枕にそ聞

七九六 立帰る浪のゆき来にいるそそふ玉よる浪の秋のよの月

七九七 心あらはよきてふかなん秋のかせ物おもふ人の夜半のね覚を

七九八 淡路島月おちかゝる明かたにこくやみ舟の音そ身にしむ

七九九 夕久礼野曾良田能目瀬伝九留雁遠我於毛婦人戸思波満志^加者

八〇〇 うき事を思ひつらねてなくかりや物思ふ人のね覚なるらん

45ウ

八〇一 ふかき夜の人さたまれる浅茅生にひとりさひしき庭の月影

八〇二 我宿はつれなき人をまたね共まかきは野へと鴉なく也

八〇三 いつこにか露はたまらん小男鹿のしからむはきもあらしたつ

也

八〇四 住の江のふかき汀による波はいくよの秋の月になるらん

八〇五 さをしかの入野の薄露しけみか手枕に月やとるらん

八〇六 月影にむしあけのせとをこき出れば八十島かけてをくる鹿の

音

八〇七 露ながら袖にくたくるあらし哉物おもふ色はそれとなければ

八〇八 時しもあれうたて吹そふ嵐哉さらてもふかき袖のおもひに

八〇九 天の戸ををしあけかたの木からしに啼やと山の禿鹿の声

八一〇 昔たれいくよの秋とちきりけんあれたる宿の庭の月影^{46オ}

八一 忍山下葉^{本ナ}ふくの浦風にうらみかほなるさをしかのこゑ

八二 宮城野の木の下露に色かほるもとあらの小萩あきそ深ぬる

八三 日くらしのなく夕影の柴の戸をあらしの外にとふ人もなし

八四 秋の露に袖もくち木のそまかたに道まとふ鹿の声そ身にしむ

八五 露しけみ草にやつるゝ故郷は袖にそ虫のこゑはみたるゝ

八六 かつらきや旅ねの月の床きよみよると契りし神やくやしき

八七 雲はれていつれの秋か月はみんおもひつぎせぬ宿の夕霧

八八 鹿のねにかたしく袖やしほるらんこよひもふけぬうちのはし

姫

八一九 ね覚する夜半のあはれをつくせとや秋しも鹿の鳴始けん

八二〇 山里のあはれをそふる村雨にきりの下はも色に出けり^{46ウ}

八二一 鳴よはるのはらの虫の声きけはわか身の秋そいとゝかなしき

八二二 君すまてとはれぬ秋もふけにけり生田のもりの有明の月

八二三 逢坂の関のゆきゝに色かはるをとほの山の秋の紅葉ゝ

八二四 はつ時雨ふれとかひなき常磐山身にしむ色を風やそむらん

八二五 わきも子か袖ふる山のうすもみちそれかとまかふ秋の夕くれ

八二六 日かすふる紅葉の下の旅衣たつ事やすきにしきなりける

八二七 立田姫をるにしきゝのたもとかも時雨の下の峯の紅葉ゝ

八二八 物おもふ人の袖よりしくれて色かはり行宿の道芝

八二九 秋ふかき難波のあしのうらかせにこやのしのやも衣うつ也

八三〇 時雨ふるもみちの露にたちぬれてなく音色こき小男鹿の声^{47オ}

47オ

八三一 かり金のきこゆる空にすむ月の光をうけて衣うつ也

八三二 いなは山松のあらしやさむからん秋のふもとに衣うつなり
八三三 まかちとるふなきの山の夕しくれそむるもみちもこかれてそ

行

八三四 奥山のいはかきもみちいたつらに時雨にそほちおる人もなし
八三五 夜やさむき時雨にきほ雁金に衣うつ也山のした庵

八三六 ふしわふるしつのまろやの竹すかき夜すから秋の衣うつ也
八三七 おなしくはもみちの露に袖かけて秋のかたみの色を残さん

八三八 きり／＼草のやとりのはつ霜にすき行秋やいともかなしき
八三九 秋はつるかれの／＼虫の初霜にむすはれ行声のはかなさ

八四〇 をく露もあたのおほの／＼まくす原恨かねたる秋のくれ哉」47ウ
八四一 露しけきをの／＼あさちに鳴鹿の声も夜ふかき長月の末

八四二 玉かつら秋のかたみにたえねとやしほれてそ吹野への木から
し

八四三 むなしくはふかきたのみもかひなきにいかにせんとか秋のく
れぬる

八四四 大空はくれ行秋のかたみかはおしむ袂もうちしくれつゝ
八四五 きえかへりあさちか末の白露に初霜むすふ秋の程なき

八四六 いつ方にかねのひ／＼きもなりぬらんあけぬかきりの秋の名残
に

八四七 山風に紅葉ふりしく道芝の露ふみわけて冬は来にけり
八四八 いつのまに谷の岩まの氷るらん秋は昨日の山川のみつ」48オ

八四九 冬きても猶色ふかしやまかせにちらぬ袂の秋のかたみは
八五〇 神無月しくれてわたる木す多より雲にわかれていつる月影

(一行分空白)

冬五十首

八五一 あやなくも露ふきむすふ嵐哉秋のとめたるあたの形見に

八五二 しくれとてこゝにも月はくもるめり芳野の奥もうき世也けり

八五三 かきくもる有明の空のしくるれば月もしほるゝ心地こそすれ

八五四 新千 いかばかり木の葉の色のまさるらん昨日もけふも時雨ふる比

八五五 散かゝる紅葉の雨にまされはや色のみふかきやま川の水

八五六 ものおもふ心や空にくもるらんさも時雨つる神無月かな

八五七 風 神無月雲間まつまにふけにけりしくるゝ比の山のはの月

八五八 立田山みねのしくれの糸よはみぬけとみたるゝよもの紅葉は」
48ウ

八五九 大かたの時雨は人をわかねとも我袖のみそいろかはりゆく

八六〇 晴まなき袖の時雨をかたしきていくよねぬらんうちのはし姫

八六一 あふみのやにほてる月は晴にけりみかみの嶽はなを時雨つゝ

八六二 冬さむみ涙は袖につらゝめて袂に白きありあけの月

八六三 月もれと嵐のふけるあはらやにあらそふ霜の袖にさえつゝ

八六四 おもへたゝこけの衣に露をきてね覚さひしき冬のよな／＼

八六五 さえわたる清滝川の岩まより氷にやとるふゆのよの月

八六六 かさ／＼きの雲のかけはしさえわたり霜をきまよふあり明の月

八六七 風さむみあさゆく道の小さゝはらうきふしことに袖はぬれつ
ゝ

八六八 昔とふふるきまかきのよるの霜なをきえかへりよひつゝそふ
る」49オ

八六九 霜かれのむくらのかともあけなくに事とふものはあられ也け
り

八七〇 たつた姫ちるやかさしの玉かつらかつら山にあられふる也

八七一 霜はらふ庭の玉さゝあられふり空さへさゆる冬の夜の月

八七二 けさみればやたのゝあさちうつもれぬかせもあらちのみねの
初雪

八七三 ちり残る秋の名残もたえはてぬもりの木葉につもる白雪

八七四 空さゆるひらの高根に雪かけてあられ吹くかせの寒けさ

八七五 難波かたそよきしあしも霜かれてしほせの浪の音のみそする

八七六 しほれあしのふし葉か下も氷けり一夜二夜のをしのよかれに

八七七 山影やなつみの川にゐる鴨の上毛の霜はきゆるよもなし

八七八 光そふのたの玉川月清み夕塩千とり夜半になく也^{49ウ}

八七九 雪ふればみなをしなへて白妙のさきさか山の松ものこらす

八八〇 ゆきつもる旅の家ゐにたつけふりこれも世にふる道やくるし

き
八八一 さはるへき山路もたえぬ冬籠り背のねしのきつもる白雪

八八二 今朝みればならのひろはにふる雪のいとゝきひしきみ山への

里
八八三 いもかすむ寺の水もこほるらしかちの葉さえてみ雪つもれ

り
八八四 さしくしのあかつき千とりおきわかれ猶つまこひのこゑ恨也

八八五 かりねする玉江の月のあけ方に声もさやかになく千鳥哉

八八六 ね覚するとふのすかこもさえわひてあかつきふかくちとりな

く也
八八七 須磨の関有明の月の塩ひかたみきはの千とりとをさかるなり

八八八 今朝みれば雪の白ゆふかけてけりこれや手向の山路成らん

八八九 ふりつもる雪ふきおろす山おろしに山のはしろくさゆる月影

八九〇 かた岡のもりの木からしさえくしてしつこも氷よはの白雪

八九一 ^{続後拾}みかりするかりはのをのゝかせさえてとたちのしはにあられ
ふる也

八九二 夕暮の空とるたかのすゝの音にゆくゑまよはぬ芝の下草

八九三 山里のすゝきをしなふる雪にとしさへあやなつもりぬる哉

八九四 身にとまる月日はいつもかはらねとくれぬる年そものはかな

しき
八九五 我またぬとしさへせてくれぬるは涙もいとゝふりそほちつ

ゝ
八九六 いかにせんよそなる春は飛鳥河なかるゝ年はしからみもなし

恋百首
八九七 いかにせんせけともあまるたもとかないはての山の谷の川

水^{50ウ}
八九八 わか恋はまきの尾山の秋の露色に出しとしのひこし哉

八九九 みすもあらすみもせぬ人のゆかりとや夕の空をかたみかほな

る
九〇〇 かせをいたみしのふのうらによる浪を我のみしりて袖にかけ

つる
九〇一 せきかへしなをも色にそ出にけるおもひによはる袖のしから

み
九〇二 忍ひあまり恋に袂はくちはてゝをき所なきわか涙哉

九〇三 おく山のすかの根しのきをく露の人こそしらねきえかへりつ

ゝ
九〇四 なけきあまり恋にたもとほくちはてゝをき所なきわか涙哉

九〇五 くらねたゝあやめてとはん人もあらし忍の山のにの埋木

九〇六 大空にいかにかまかへんもしほやくあまたにつゝむこひのけふ

りを

50オ

九〇七 あふ事はとを山鳥のをのれのみななき恋路のためしとそみ
る」^{51オ}

九〇八 としふともしらしな心あまをふねかま本のほなはのたえすこふ
ると

九〇九 我恋はいそまをわけていさりふねほのかにかよふ浪のまもか

九一〇 命あらはめくりあひなんひたち帯結びそめてし契くちすは

九一一 下紐のむすほれゆくらみかなゆふてもたゆくとけぬ思に

九一二 久かたの日影のかつら手にかけて心の色をたれにみせまし

九一三 あふ事のかたみのうらのうつけかひむななきこひの絶ぬ年の

九一四 つくはねのみねはや人のつらからん衣手かれてひとりぬる夜

九一五 はるしこはつらき心もとけならんうら山しきはけさの池水

九一六 夏むしの身よりあまれるおもひかはあはてきえめやなみのう

九一七 みちをなみ山したしけき夏草のしらぬ恋路も露そこほる」^{51ウ}

九一八 逢みても夢かとおもふうたかひにうつなからもなをやうら

九一九 つれなきをうらみもあへすふくるよにすむるものは泪也け

九二〇 いかなれやちぎりし色はそれなからわかかねことのはてそか

九二一 むつこともあふ人からのならひかもいつらは夜半もなか月の

空

九二二 おもひかねなく／＼わけし白雲の忍ひし中を何へたてけん

九二三 あま人ののをのれけふりとなりしよりみるめはたえぬ塩かまの

九二四 我為はつらき心のおくの海のいかなるあまのみるめかるらん

九二五 さても猶面影たえぬ玉かつらかけてそ恋るくる夜ごとに

九二六 君こふる涙や空にかよふらんおもひはてける夜半の村雨

九二七 かるかやのみたれてものをおもへとも君か下葉の露そつれな

九二八 くやくそたのむもつらしみつの泡の消て留らぬ人の情を

九二九 恋せよとなるみのうらの塩干瀉かた思にそしほれわひぬる

九三〇 あふ事のまとをの衣名につらししほれ侘ぬる須磨の浦人

九三一 恨わひさてもたゆましかたもあらしあはてへにける年のしる

へに

九三二 袖のうへに秋をく露の玉すたれかけてこふるを知人のなき

九三三 野分せし昔の秋のゆふへより面影さらぬ山のはの月

九三四 そのまゝに涙の露もをきかへすありしなからのつけのを枕

九三五 たのめても心つくしにふけぬなり待よるすくと君につけこせ

九三六 ふけにけり中／＼な／＼たのみけん人の契りも浅茅生のやと

九三七 袖の上にむすほれ行なみた哉軒はの萩のちぎりはかりに」^{52ウ}

九三八 わするれとちぎりしほと夕くれは松吹かせそかたみかほな

九三九 まとろまで月にあかせる夜ころ経て夢路もうとき人の面影

九四〇 なをさりの遠方人やはらふらんあはてくるよの道芝の露

九四一 かくしつゝいつかどくへき下ひものむすひもをかぬ人の契に

九四二 恨侘てさてもあはせん人もかな夢よりけなるあたの契を

九四三 さても猶たえぬ契をたのむ哉おもひ忍ふのりのしめ縄

九四四 我涙しくれとともに故郷のあさちかもとをとふ人もかな

九四五 玉をなす涙の露の袖のうへにをきてけぬへき朝ほらけ哉

九四六 御垣守衛士のたく火はよそなれととへかし人もゆるおもひ

九四七 女郎花はなのたもとに露をきて誰夕くれの契まつらん」^{53オ}

九四八 恋すてふ名のみたかしの涙千鳥なく／＼かへる袖のあた浪

九四九 おもへたゝ逢夜まれなる明くれに露きえわひし人の面影

九五〇 つらけれとさすかにかよふ心哉身をうちはしの中もたえなは

九五一 おもひねの夢のしるへのはかなさをたのむ程なるなくさめも

かな

九五二 今日もまたならのを川にみそきしていのりやせまし人の契を

九五三 君かためふかきおもひやとふ鳥の声も聞ぬ山のはの月

九五四 袖のなかに人のなこりをとめをきて心もゆかぬしのゝめの空

九五五 恋わひてねもやしなましむは玉の夢にたのめし人や待らん

九五六 おもひ入こひの道芝秋すきてとはてかれぬる草の原哉

九五七 霜こほりあられみたるゝ冬のを君きまさねはこひつゝそぬ

る」^{53ウ}

九五八 たのめこし有明の月のそれなからおなし袖にもめぐり来にけ

九五九 かはらしといひししる柴いかならんよもの山辺も時雨ふるこ

ろ

九六〇 谷ふかくたつをたまぎの心地しておもひも袖も朽や果なん

九六一 うきしつみこふるもくるしみたれ声の末こす浪のしほれ侘つ

九六二 ぬる夜なき心のとかに年を経て夢の契りもいくよへたてつ

九六三 ともねせぬかものは毛のよるの霜おきあかしつる袖をみせ

はや

九六四 恋わふる涙にくもる秋の空みしやその夜の月なへたてそ

九六五 あちきなくなかきかたみのつらさゆへ君にとめてし我心かな

九六六 人しれす我身にしむるゆふくれをしらすかほにや君なかわら

ん

九六七 なけきつゝねぬよの空の月影を恋しき人のかたみにそみる」

九六八 又ねしてあかぬ名残をみる夢に二たひ袖をぬらしつる哉

九六九 晨明のつれなくみえし空のみやなれし名残のかたみ成へき

九七〇 恋すとして袖には雲のかゝらねと涙の雨はをやみたになし

九七一 あふ事のかたむすひなる白糸のとけぬ恨も年そへにける

九七二 菅枕たまちる闇のそての上にぬるゝかはなる床の月影

九七三 わきも子かゆへつゝましくさしもやはつれなき人を思わたら

ん

九七四 恋衣しほる涙の手をたゆみしはしたゆまんそてのまもかな

九七五 明かたをしらすとりのつらさゆへ我なみたさへせきそかね

ぬる

九七六 逢みてもいつれを夢とわかぬまに泪たくる床のさむしろ

九七七 秋かせになひくさ山のくすかつらくるしや心うらみかねつ

る」^{54ウ}

九七八 かせの音のそれかとまかふ夕暮の心のうちをとふひともかな

九七九 おもひ草葉すゑも今は霜かれて秋の末はの人のおもかけ

九八〇 かせのをとのたのめしくれにゝたる哉おもひ絶にし庭の萩原

九八一 うき人をしのふの衣あちきなくつれなき色に何みたるらん

九八二 もろかづらかけてやとふと待わひぬはかなき草の名を頼つゝ

九八三 契りさへ浅沢ぬまのかきつはたへたて出ぬる名こそつらけれ

九八四 衣／＼の人の別の明くれをむすひもとめぬ道芝のしも

九八五 我恋は色もかはらずしからきのまきのそま山時雨ふれ共

九八六 あふ事も今はつかの山のなも我身ひとつにふくるよのつき

九八七 恋て鳴もりのうつせみ木かくれて下葉の露ををのれやはけ

つゝ 55オ

九八八 わするなよけふは昔の秋までもこの夕暮の萩のうはかせ

九八九 ふみわけしあとをかたみのにはつ鳥かけのなかおのみたれて

そ思

九九〇 たのめをさし露のやとりをわけわひて君にそまとふ道のさゝ

原

九九一 逢みてし人をしのふにをく露はわすれかたみの涙也けり

九九二 暁のわかれは袖にふかきより行もとまるも露こほれつゝ

九九三 俤をいくよの月に残すらんつれなくみえしひとのなごりに

九九四 身にちかき我みの秋をなげくまに木葉さへこそ色かはりゆく

九九五 思出るまかきの菊もおり／＼はうつろひはてし秋の契を

九九六 わすれゆく人の心をなげくまに我袖さへも色かはりけり

(一行分空白) 55ウ

統古 雑百首

九九七 かこの島松原こしにみ渡せば有明の月に田鶴を鳴なる

九九八 初瀬山入あひの鐘の声すみて檜原かすゑに雲そかゝれる

九九九 おほ空は時雨ぬ春もあるものをいつも秋なるわかたもと哉

一〇〇〇 きえやられて波にたゝふうた方のまるへしらせよ八重の塩風

一〇〇一 世中は如何たのまん飛鳥川昨日のふちの浅せしらなみ

一〇〇二 よふねこくふち江の浦のあり明に浪路を送る月のさやけさ

一〇〇三 それとなく思いつれば袖をぬるゝすきにしかたの夕くれの

空

一〇〇四 稀にあくる松の戸はその明方にみし世ににたる月をみる哉

一〇〇五 山ふかみその名もしらぬときは木のしけき峯にも月は澄け

り 56オ

一〇〇六 いそのかみふるのゝさはのまろ木橋くちぬるものはたもと

也けり

一〇〇七 塩かまのうらくこくふねのつなて縄くるしきものはうき世也

けり

一〇〇八 みさこあるいそまの松のふかみとり色もかはらぬおきつ塩

風

一〇〇九 こさちらす滝の白玉からねとも涙はつきぬものにそ有ける

一〇一〇 山さとのまきのいた橋あれはてゝとはれぬ程も余所にみゆ

らん

一〇一一 芳野山。のかけみちわけいらはいかはかりなる露のをくら

ん

一〇一二 かり人のいるのゝ草やふかゝらんひくゆすゑのかけを行

かふ

一〇一三 けふもくれあすもすきなはとおもふまにむなしき年の身に

つもりつゝ

一〇一四 山もとの松の験もたのめをり誰かはとはん三輪の夕くれ

一〇一五 すまの関たれしのへとか浜千鳥ゆくゑも知ぬあとの月影 56ウ

一〇一六 うちばへて波まになひくはすなはの恨てかひの有世也せは

一〇二七 すてやらぬうき身のはてのかなしさをなげきながらも猶す
こす哉

一〇二八 なさけあらは四方のかたより吹かせのつてを尋てとふ人も
かな

一〇一九 大かたのうつゝは夢になしはてつぬるかうちには何をかも
みん

一〇二〇 なげき余りをき所なきうき身哉袂は露のやとりなれとも

一〇二一 奥山のをのかふもとをまかきにて岩かきし水庭にせくかな

一〇二二 岩ねふみわけこし峯のかたみとやかさぬる山にかゝる白雲

一〇二三 露なからたかはかりしきさぬる夜は夢も旅ねの床やみゆら
ん

一〇二四 かきくらす野山の雪はきゆれとも身のおもひこそ年つもり
けれ

一〇二五 いさこゝにわか世はへなん久かたのかつらの里の月のよな
／＼」57オ

一〇二六 玉もかるしきつの浦のたひねには磯の松かせ身にやしむら
ん

一〇二七 ありしにもあらずなるよの駿とやまつ色かはるこけの袖哉

一〇二八 故郷もとを山すりのかり衣いく朝露をそてにかくらん

一〇二九 枕とて草ひき結ふ宮木のゝ秋とたにやは月もたのまん
一〇三〇 いへはえにかはらぬ月そうらめしき我のみふるきこけのた
もとに

続後拾
り

一〇三一 露しけきのしまか崎のたひねには浪こさぬよも袖はぬれけ
り

一〇三二 人はみなもとの心そかはりゆく野中の清水たれかくむべき
続古

一〇三三 から錦たれかたむけし色なれや紅葉のぬさの秋の山みち

一〇三四 山ふかみまきの戸たゝく木からしに泪のこらぬ床のさむし
ろ

一〇三五 物おもへとなるみのうらの浜楸ひさしくなりぬうき身なか
らに」57ウ

一〇三六 くものなみけふりの波路へたつともとへかし人のおもふか
たより

一〇三七 あさりするたななし小舟こきかへりえしまか磯はあかすか
もみん

一〇三八 松島のあまのとまやはしらね共我袖のみそしほれ侘ぬる
わか心なくさめかねていくよへぬをは捨山の月はみねとも

一〇三九 そての名になれてもかなし奥山の松のは分の有明の月

一〇四〇 ふれはかく涙もいとゝふかき夜のまとうつ雨は袖にかけね
と

一〇四一 すみわひて爪木こるへき宿ならはさひしさのみはなけかさ
らまし

一〇四二 住吉の八十島遠くなかむれば松のこす糸にかゝるしら浪

一〇四三 山さむみかせもさはらぬこけむしろ立るにつけて袖そぬれ
こし

一〇四四 身のうきをなげくあまりの夕暮に問もかなしき磯の松か
せ」58オ

一〇四五 さゝめかりのはらの露にさぬれつゝこひの衣のおもかけそ
たつ

一〇四六 うかりける世にすみかまのうすけふりたえみたえすみもの
思ふ比

- 一〇四八 山路をはまた夜ふかくそ出つらんあくれはくたるうちの柴舟
- 一〇四九 かせはやみ浦にたゞよふうきふねの定めなき世を何したふらん
- 一〇五〇 しつめかあれ田のくろにこせりつむあさの衣もかくはしほれし
- 一〇五一 とまりするあまのもくつに引とまの隙なく物をおもふ比較
- 一〇五二 いく夜われうらはの浪にそほつらんあまのなはたきいさりせね共
- 一〇五三 おきつ島あまの磯屋の藻塩草かく数ならてよをやつきなん
- 一〇五四 いつくとも昔の庵の跡ならんよをうち山の秋のゆふくれ
- 一〇五五 故郷にとめてもみせんと思ひしを袖にも月そかき疊にし」
58ウ
- 一〇五六 うき舟のこかれてわたる浪のうへによるへしらせよ沖津塩風
- 一〇五七 松の戸やさしも夜ふかきかねの音に涙の露のをきあかしつ
- 一〇五八 まつかきのましはのとほそあけくれはおもひみたれてよをやつくさん
- 一〇五九 大方に人をはわかぬかせの音もやとからつらき山の夕くれ
- 一〇六〇 我おもひつもり／＼てあらたまのとしをあまたもなけきこし哉
- 一〇六一 いつとなきをくらの里に心あれやくれぬといそく山のはの月
- 一〇六二 久堅の空もあはれとてらさなんあふくかひなく年のへぬれは

- 一〇六三 いとしく物おもふやとの道芝に露をきそふるよはの村雨
- 一〇六四 奥山のいはねにたゞむ苔むしろたかしきすてし名残成らん
- 一〇六五 なけきあまりいく世のとしをせめきけん夢の内なる夢をみしまに」
59オ
- 一〇六六 水草。一ゐて月さへすまぬ故郷の岩もるしみつけふやくまし
- 一〇六七 おいにけるすかたの池のうきぬなはくるしき世をそおもひわつらふ
- 一〇六八 笠ゆひのしまこきわかれこく舟の跡ゆく波のあはれ世の中
- 一〇六九 花の色とりのこゑにもなくさますうき世をさとるかりのやとりは
- 一〇七〇 くやしくそあたのすさみに年を経て仏のみちになをやたらん
- 一〇七一 そむけともかことはかりのこけの袖心をそむるなくさめそなき
- 一〇七二 誠には仏の国もよそならすまよふかきりそうきよともみる
- 一〇七三 夕まくれのりの山田もひたはへていのちもしかとおとろかすとも
- 一〇七四 なにとなくなにかしのふ徒に思もをかし露のよの中
- 一〇七五 みる程もしはしなくさむ隙もかなあらしも月もつねならぬよに」
59ウ
- 一〇七六 世中のつねなき色をしれとてや露のやとりに月もすむらん
- 一〇七七 ひとりきく暁のかねのつく／＼とおもふねさめそ夢には有ける
- 一〇七八 にしへゆく心の月のしるへあれとまたはれやらぬ雲そかなしき

一〇七九 燈のつくるをきはにおきぬつゝこの世を草とさとり行かな
一〇八〇 をろかなる心のうちをたつねみよほかに仏のみちしなけれ

一〇八一 統計は
いとふなよくるしきうみによる波もみのりの仏のほかにや
はたつ

一〇八二 おもひとけは心につくる六のみちをいとふそやかてまとひ
也ける

一〇八三 あきらけき道にもいかてさとりいらんまたふかき夜の夢の
行末

一〇八四 入月にあふきをあけてたとふれとうきよのやみそかこつか
たなき

一〇八五 空にかふ身のをこたりのつれなきをなけきくのはてをし
らはや」60オ

一〇八六 もろ神をたのみしかひそなかりけるあてのしはらそ手には
くまねと

一〇八七 いにしへのなけきのもりの名もつらしわかねきことの神の
みつかき

一〇八八 神風やとにさかのほるあさ日影くもりはてぬる身を敷つゝ
一〇八九 哀しれ神のめくみはしらねともいせまでなをもかくるたの
みは

一〇九〇 おりしかんたひねもつらし浪まくら名はむつまじきいせの
浜萩

一〇九一 おもひいつる袖にそ影はやとりけるその神山の有明の月
一〇九二 住吉の神の験しも頼め共心のうちのまつは年経ぬ

一〇九三 あまくたる神もあはれとみつの浜心のしめをかけてたのま
ん

一〇九四 かはらしとたのみし物を足引の山のみなみのまつかせのこ
ゑ

一〇九五 たのみこしするしもいかゞ岩しろの野中の松にむすぶ恨
を」60ウ

一〇九六 わかたのむ御法の花の光あらはくらきにいらぬ道しるへせ
よ

印本是迄アリ (貼紙)

(九行分空白) 61オ
(半丁空白) 61ウ

〔今回より山本と佐藤(大阪大学大学院)の共同作業
によって翻刻を行なう。〕